北区ゆかりの偉人　渋沢栄一翁

国立国会図書館所蔵

2024 年に一万円札の顔となることが決まった渋沢翁。

「日本資本主義の父」と言われ、500 近い会社の設立・育成に尽力し、日本を導いていきました。

渋沢翁は、明治 34 年（1901 年）から昭和 6 年（1931 年）91 歳で永眠するまでの 30 年間、北区の飛鳥山に住みました。

～王子製紙の立ち上げ～

明治５年、渋沢翁は製紙事業を官営で行うことを建議し、抄紙会社の設立願書を提出して設立が認可されました。

工場の敷地選定に際しては、渋沢翁自身も各地を調査したあと、工場用水の面から王子に決定しました。

王子地域と渋沢翁との関係はまさに同社設立から始まり、渋沢翁は同社を近代的な機械工場の模範として広く知らしめたいと考えていたそうです。

～本邸を構えた飛鳥山～

明治初年の渋沢翁の考え方に「職住接近」というものがありました。

王子製紙工場を構え、その工場を見晴らすために37歳の時に飛鳥山の地に4,000坪の土地を購入し、別荘として構えました。

そして、61歳で飛鳥山に本邸を構え、生涯をこの地で過ごしました。

青淵文庫

～渋沢翁が導いた地域～

渋沢翁は日本近代経済社会の発展に尽力していく中で、王子・滝野川地域施設への助言や寄付なども行い、地域の発展を大事にしました。

滝野川町役場庁舎の新築、滝野川警察署、消防、小学校など、町行政の整備に対して支援をしました。また、地域の社会教育・文化事業にも関わり、その他に西ヶ原互親会など地域住民による自治組織の発展の援助等も行い、北区を新たな時代へ導いていきました。